

平成州紙



おりおりの記

## 非書齋人が読む書物

日本取引所グループ  
取締役会議長

津田 廣喜

本欄は趣味について書かれる方が多い。私には趣味というほどのものがない。費やす時間のうちでは、本を読むそれが相対的には長い。ただ、趣味とは違う。大学院の教師をしていた時には、書物や資料（史料）を渉猟するのは「商売」に必須だった。

至って散文的な人間だが、これは若い頃に古今東西の小説をあまり読まなかったせいかもしれない。今は、仕事に関係するものを除くと、分野に限定はない。面白そうなら何でもいい。政治学、哲学、社会心理学などの分野では、再読も少ない。名著といわれるものは、さすがに、いつまでも色褪せることがない。江戸の市井を描いた肩の凝らない小説も好む。ただ、書き手により底が浅い深いの違いが大きいには、注意を要する。

以下、いくつかの関心テーマについて。

(一) 一神教はとうとう理解できぬままに終わりそうだ。聖書は旧約も新約も知識としては身に付いても、「神との契約」よりは「八百万の神」の方が心に響くようでは、是非もない。以前から、紀元一世紀における初期キリスト教の形成過程や当時キリスト教と民衆への浸透を競った教えの実態などを知りたいのだが、ジャン・ダニエルー『キリスト教史1—初代教会』などでも、どうも漠として掴みどころがない。未発掘の新史料でも出ない限り、これ以上は無理か。

(二) 現代日本人の系譜。最も説得力を感じたのは、松本秀雄『日本人は何処から来たか』。「Gm型遺伝子分析」によると、現在の日本人と



最も近いのはシベリアのバイカル湖周辺に住むブリアート人であり、日本民族の起源はその辺りの由。北西と繋がるとする推論は言語の系譜とも符合する。統計的に有意なサンプル数での結論なら大したものだ。

(三) 日本が負ける戦争をやった理由。書物は汗牛充棟。堀栄三『大本営参謀の情報戦記』の謂うところは、「軍の主兵は航空なり」、「鉄量〔砲弾量のこと〕を破るものは鉄量以外にない」。日本には神風が吹くとする熱狂でなく、身も蓋もないことを事実として認識する冷静さを持つことの大切さが分かる。ただし、これは今の日本人にも難しい。

この齢になると、読んでから後悔する余裕がない。書評を見たり、書店でまえがき・あとがきを読むなど、面白いものだけを選ぶ準備が必要になっている。